

まえがき

『東京芸術大学百年史 東京音楽学校校篇第二卷』を刊行する運びとなりました。

大正時代から東京音楽学校の終わりまでの約四十年間に、本校は唱歌編纂や邦楽調査などの国家的な事業を担いつつ、欧米の模倣を脱して徐々に独自の歴史を歩み始めました。しかしその一方、戦中戦後を通じて激動の時代にさらされ、混乱と窮乏を経験したことは本校も例外ではありませんでした。戦時色が強まった昭和十年代後半には、本校主催の演奏会はさまざまな制約を受けながらも報国団の名のもとに継続されましたが、外国人教師の処遇に影響が及び、校内に防空壕が掘られ、終戦近くには、校舎のスチームが金属として回収されるなど、楽の学び舎にも寒い冬が訪れました。この間の歩みについては、本巻に掲載する原資料の数々が何よりの証言となりましょう。

昭和六十二年十月に『東京音楽学校校篇第一卷』を刊行したさい、同巻の範囲と重なる項目のいくつかを『第二卷』で扱うこととなりました。たとえば明治四十年代に設置された唱歌編纂掛と邦楽調査掛、建物の変遷、演奏会プログラム、音楽取調掛および東京音楽学校による唱歌歌詞、それに明治時代に任用され在職期間が大正・昭和にわたる教師などが挙げられます。

その結果、『東京音楽学校校篇第二卷』で扱う資料がきわめて膨大なものとなるため、東京音楽学校発足から創立百周年までの演奏会を集中的に扱う巻を先に編集する方針をとりました。全三巻からなる『演奏会篇』（第一巻Ⅱ明治・大正、第二巻Ⅱ昭和の東京音楽学校、第三巻Ⅱ昭和六十二年までの音楽学部）は平成五年九月までに刊行されました。しかし、邦楽調査掛の成果を披露した邦楽演奏会は邦楽調査掛とともに『東京音楽学校校篇第二卷』で扱うことといたしました。

『東京音楽学校篇第二巻』は『第一巻』に倣い、項目別に編年体で構成しています。

本巻の口絵には、『第一巻』同様、年々の卒業写真を継続掲載しましたが、そのうち昭和十年代以降については教師と卒業生の氏名が可能なかぎり判明するよう、卒業生はじめ広範囲の方々に協力を依頼し調査いたしました。また東京音楽学校全体の資料として、約千人にのぼる東京音楽学校の全教職員について、在職期間はもとより年度ごとの担当分野や身分などを表にまとめて巻末資料としました。

なお、戦後の新制大学への移行期に起こった事項として邦楽科設置問題がありますが、これについては続刊『音楽学部篇』で取り上げる予定です。

『東京音楽学校篇第二巻』は、多くの方々のご協力の賜であります。

まず、出版を引き受けてくださった株式会社音楽之友社取締役社長岡部博司氏、直接担当された制作管理部部長石井悠二氏に厚くお礼申し上げます。

また根気よく励まし続けて下さった元編集委員の服部幸三氏、大石清氏、角倉一朗氏、本巻の執筆に携わり、刊行までご協力賜った元編集委員の森節氏、大貫紀子氏に感謝申し上げます。

さらに戦中戦後のことに関して、本学元職員や卒業生、ご関係の方々から、寄稿や資料提供や取材協力などによりご協力頂きました。心よりお礼申し上げます。

本巻の作成にあたりご協力頂いた次の方々のお名前をあげ、とくに感謝申し上げます。

東京音楽学校校長乗杉嘉壽に関して、御子息乗杉恂氏より膨大な著作についてご教示賜り、さらにそれらの整理にいたるまで惜しみないご助力を賜りました。

同校長小宮豊隆の著作と関連資料について、御息女小宮里子氏および福岡県峯高寺住職村上達亮氏に数々の資料をご提供頂きました。

同校教授鳥居忱に関して、栃木県壬生町在住の渡邊達也氏（東京美術学校卒業の画家、美術史家、郷土史家）、および壬生町立歴史民俗資料館より、資料提供と貴重なご教示を頂きました。

戦時中の記録と旧職員の経歴等に関して、東京大学史史料室より数々ご教示賜りました。

本巻編集に必要な様々な資料調査において、財団法人日本近代音楽財団日本近代音楽館に度々ご協力頂き、ご助言を賜りました。

東京音楽学校時代のさまざまな記録に関しては、本学同声会事務局より長年にわたりご協力頂きました。

最後に、本巻の資料調査・整理・手書き原資料読み下し・校正など、編集実務に携わった石田桜子、衛藤恭子、小倉眞理、大河内文恵、勝谷祥子、加藤久美子、川西真理、木村充子、倉橋玲子、国府華子、鈴木香於里、鈴木千帆、高原聰子、千葉潤、平沢博子、福岡まどか、三宅由美子、村上康子、山原麻紀子の各氏のお名前をあげてそのお骨折りに感謝の意を表します。

平成十五年三月

山本文茂
船山隆
土田英三郎
佐野靖
橋本久美子